

近代の博覧会 Modern-age Expositions and Chanoyu と茶の湯

併設展 印籠 -Inrō- の世界
The World of Inrō

19世紀後半、万国博覧会は各国がそれぞれ独自の思想や最新技術を示し、国家の威信をかけて臨む祭典でした。明治維新を契機として近代国家への道を歩みはじめた日本は、各国で開かれる万国博覧会で欧米諸国の先進技術を学び取る一方、茶の湯を日本固有の文化のひとつとして世界にアピールします。また日本国内では、裏千家十一代家元玄々斎精中(1810-1877)の創案に基づき、高弟前田瑞雪(1833-1914)が、明治5年(1872)開催の第一回京都博覧会において訪日外国人のために卓と椅子を用いた新しい茶の点前「立札」を披露するなど、西洋化する生活様式に対応した形式が考案されます。

本展では、国内外で開催された博覧会へ出品された千家十職の作品や、立札の成立を示す史料、京都の伝統工芸に取り入れられた新しい技術や図案をあぐる作品などを展示し、日本を取り巻く情勢が大きく変容した時代の茶の湯について紹介します。

主な展示作品

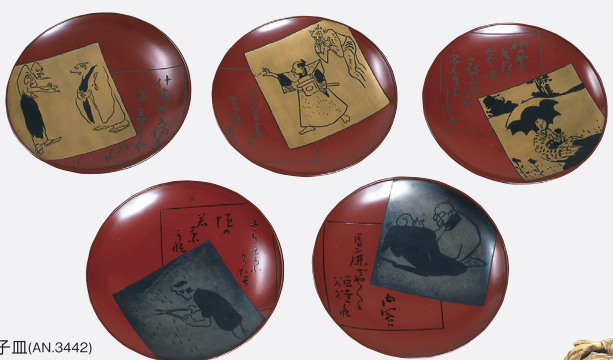
- 町野長門守伝符状 十一月二十一日付 肝煎百姓中宛 樂美術館蔵
- 兜釜 初代宮崎寒雉作 今日庵蔵
- 夕顔台子皆具一式 宝鏡寺蔵



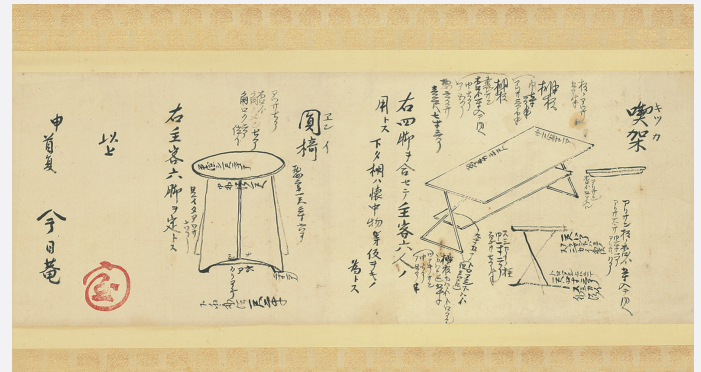
女礼式之内 抹茶ノ部 安達吟光画 大判錦絵三枚続 今日庵文庫蔵 【後期】



交趾釉花壇園水指(部分)
(抹茶器一式のうち)
永楽得全作
東京国立博物館蔵
Image: TNM Image Archives



菓子皿(AN.3442)
杉林古香作(図案淺井忠)
京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵



立札之図記 玄々斎筆 今日庵蔵

併設展 印籠 -Inrō- の世界

印籠とは元来印判朱肉を納める重箱形の容器のことで、次第に用途が薬入れに変化し、腰から吊り下げて携帯できる形状になりました。江戸時代後期、精巧な装飾が施されるようになった印籠は高価な装身具として大名や有力商人の間で流行しました。明治時代に入ると欧米のコレクターに珍重され、訪日外国人の手土産や博覧会を介して数多くの印籠が海外にわたりました。

併設展では、海外からの里帰り品を含む印籠と根付、および印籠筆筒を展示します。



回り灯籠図時絵印籠 梶川作



交通案内

[市バス]

- JR京都駅中央口のりばB1より⑨阪急大宮駅下車3番出口→四条堀川より⑨⑫いづれも堀川寺ノ内下車、徒歩3分
- 京阪出町柳駅より⑩⑫堀川今出川下車堀川通東側を北へ徒歩10分

[地下鉄]

- 烏丸線鞍馬口駅下車、西へ徒歩15分
- 東西線二条城前駅より市バス⑨⑫堀川寺ノ内下車、徒歩3分



メンバーシップ校

- 京都造形芸術大学、立命館、光華女子学園、京都大学、京都工芸繊維大学、同志社、京都教育大学、平安女学院、京都文芸学園、花園学園、京都精華大学、京都府立医科大学、京都府立大学、京都外国語大学、京都産業大学 (加盟順)

茶道資料館

Chado Research Center

〒602-0073
京都市上京区堀川通寺之内上る寺之内堅町682番地 裏千家センター内
TEL : 075-431-6474
<http://www.urasenke.or.jp/texte/gallery/tenji/index.html>
<http://www.urasenke.or.jp/texte/organ/konnichian/gallery/index.html> (English)

